

口癖は “やってみよう!”

(大阪府八尾市)

(株)トクビ製作所 専務取締役

小田桐 勝彦 (70歳)

小田桐さんは1944年、兵庫県神戸市に生まれた。高校生の時、大学は機械系の学部に進めればい程度に考えていた。担任に「絶対入れる学部はどこですか」と聞くと、「農学部やな」と返ってきたため、大阪府立大学の農業機械科に進学を決めた。「ここでポンプについて学びました。今の仕事でもとても関連の深い機械部品にこの時に出会ったんです」。

大学卒業後は、学んだ知識を活かしたいと考えて、農業機械メーカーに就職した。そこでポンプの技術開発の部署に配属された。「とにかく、物を作ればバンバン売れる時代でしたから。技術開発も忙しかったのを覚えています」。

入社から7年たった頃、親戚が経営する会社からオファーがあった。“どうしてもきてほしい”という要請を無碍にもできず、小田桐さんは親戚の会社に転職した。

新しい職場は製缶工場だった。ここでは設計として、図面を書く日々が続いた。「この仕事は、前職みたいにポンプは関係ありませんでした。しかし、私が入社した時、洗浄機をやりはじめたんですね。それで、今いる特殊ピストン



製作所(現:トクビ製作所)と関係ができた」と言う。一生懸命働いた製缶工場も5年ほどで閉鎖することになった。

“さあて、どうしようかな”と考えていたところに、ポンプや関連製品を得意とする特殊ピストン製作所から、当社に來ないか、と声が掛かった。

「最初は、“家から遠いからいやや”と思っていたんですけども。アルバイトならってことで、行きはじめました」と、アルバイトとしてポンプなどの設計に携わる。

しばらく通っていると、あるとき社長から「君、正社員になったで」と声をかけられた。「いつのまにか正社員になっていました(笑)。“えー何で?”なんて当時は思いましたけど、結局今も在籍していますから、その時の私も、実はいやではなかったのじゃないかな」。正社員になってからは、設計もやりつつ、営業にも行くようになっていった。

◎ 社運を背負った独自製品の開発

同社では、他社との差別化を図るため、高圧ポンプの製



ポンプも長い付き合いとなった



高圧ポンプ

加工品の仕上がりもチェック



現場の様子も気になる

造を行っていたが、2007年に社名をトクビ製作所に変えて再スタートするところで、高圧ポンプを活かした独自製品を作っていく新事業を立ち上げた。そこで誕生したのが、金属加工時に、バリなどを強力な水圧で吹き飛ばす高圧クーラントシステムだった。その開発に小田桐さんも携わり、3~4年の開発期間を経て完成させた。新製品開発は難しくなかったのか、と聞くと小田桐さんは笑顔で、「社長がノウハウを持っていたこともあって、開発は思ったよりすんなりいきましたよ。でも、大変なのはそこからでした」と言った。

小田桐さんは設計よりも営業と技術開発の仕事が増えていった。外に出れば、顧客の声も入りやすくなる。そうすると、改良点も見えてくる。「たとえば、自社でテストした時には問題がなかったのに、ある客先に納入してみたら問題が起こる箇所もあった。なんでやるかと、売ってからの

方が悩むことも多いのです。やっぱり経験しないと分からないものもある」。今でも、技術課題は尽きない。

◎ まずは“やってみる”こと

現在、高圧クーラントも50MPaの超高圧仕様のものや、コンパクト化した製品など多様な製品群が開発され、それに伴って顧客のニーズや生産技術の問題も増えた。小田桐さんは、営業と製造の間に立ち、生産管理の役割を担っている。「生産管理も今は私の仕事ですが、後継も育てていかねば。これも私の仕事ですね。まだまだ取り組むべき課題は多い」と口を引き締める。

設計から始まり、新事業の製品開発・営業・生産管理と、これまで多くの責務を担ってきた小田桐さんの根幹には、“できないと言わないこと”というモットーがある。

「営業をやっている、開発をやっている、無理だなんて思う要求をされる場合もありますよね。でも、“まずはやってみよう”ですよ」。そう言って「やってできるかもしれないし、無理かもしれない。でもね、高圧クーラントシステムの開発の時と同じです。やってみてから悩むこともある。それでもいいんじゃないですかね」そう言って、朗らかに笑った。

おだぎり かつひこ 小田桐 勝彦氏

1944年、兵庫県神戸市生まれ。大阪府立大学卒業。農業機械メーカー、製缶業を経て、特殊ピストン製作所に入社。趣味は読書で、主に推理小説を読む。好きな作家は西村京太郎氏。